

東北大学大学院歯学研究科 インターフェイス口腔健康科学 第53回学術フォーラム *Forum for Interface Oral Health Science*

An Update on the Biopsychosocial Concepts of Temporomandibular Disorders

Christopher C. Peck 先生
シドニー大学歯学部 部長

平成23年7月26日 (火) 17:00~18:00

B4 セミナー室

<企画趣旨>

今日、顎関節症を生物心理社会 (Biopsychosocial; BPS) モデルに基づいて理解し、管理することに異を唱えるものはあるまい。慢性的な運動器痛の管理に関して、臨床症状と責任病変との直接の因果関係を想定する生物医学 (Biomedical; BM) モデルの限界が指摘され、代わってBPSモデルに基づく集学的アプローチの有効性が報じられている。顎関節症の管理も、他の運動器痛と同様に、認知行動療法などを含む集学的アプローチへの移行を果たしたに過ぎない。

とはいえ、顎関節症のBPSモデルに基づく理解が拡大した背景に1992年、DworkinとLeRescheが発表した研究用途の顎関節症診断基準RDC/TMDがあった事実には、いささか注意を要するであろう。既に20の言語に翻訳され、今後、臨床用途の診断基準DC/TMDや研究用途の診断基準第2版の上梓も予定されるRDC/TMDは、身体面を評価する第1軸と心理社会面を評価する第2軸の2軸からなる診断法を、その最大の特徴とする。その点で、BPSへの志向とは裏腹に、症状を身体面ならびに心理社会面の諸要素へと還元しかねない点で、BMモデルの特定病因論への後戻りの危惧を孕んでいるからである。

BMモデルからBPSモデルへの移行は、医療者の視点の一大転換であり、それだけに容易ならざるものを含んでいる。Peck教授の今回のご講演から、その隘路の辿る道筋を探ってゆきたい。

モデレーター: 加齢歯科学分野 服部佳功

電話: 717-8396 E-mail: hattori@dent.tohoku.ac.jp